

「中1ギャップ」における問題と背景 — 小学校から中学校への接続における生徒の困り感について —

Problem and background in "Chu-ichi Gap"

For a sense of troubled students in connection from elementary school to junior high school

中村仁志*・太田友子*・丹 佳子*・福田奈未**

Hitoshi Nakamura*, Tomoko Oota*, Yoshiko Tan*, Nami Fukuda**

要旨

学校不適応防止の目的で行っているこれまでの調査から、いわゆる「中1ギャップ」と言われる小学校から中学校の接続において十分に適応できない実態が見えてきている。今回、調査事例を増やし、この傾向に対する有効性を検証すると共にその背景を検討した。方法として平成24・25・26年度の5月と10月に中学校1年生216人（有効回答数は205人）を対象に、抑うつに関する質問を中心に困っていること等についてアンケート調査を行った。学校については、5月、10月ともに90%を超える生徒が「楽しい」と答えていた。勉強については5月に「分かる」、「楽しい」と答えた生徒が10月には有意に減っていた。パールソンの抑うつ傾向自己記入式評価尺度（以下DSRS-C）の平均点の比較で5月には7.9point、10月では8.6pointであり、有意な差は認められなかった。16point以上の抑うつ状態といえる生徒は5月に20人（9.8%）、10月に19人（9.3%）だった。DSRS-Cのpointと8項目での困りごとの有無とを比較をしたところ、5月は「（困りごと）あり」が平均11.6pointであり、「なし」が6.8point、10月は同様に11.4pointと7.6pointで5月、10月ともに有意な差がみられた（ $p<.01$ ）。DSRS-Cおよび抑うつの下位項目では思春期心性の中で遭遇する多くの課題、「やろうと思ったことが上手くいかない」、「緊張しやすい」、「いやなことを思い出す」、「集中出来ない」、「イライラしやすい」とした精神面での特性が見られた。今回、「中1ギャップ」として浮き彫りになったのは、「学習の理解」と「思春期心性」の2つの側面であり、その側面に対する支援を行うことで、学校生活等を健康的に過ごすことができると考えられた。

キーワード：DSRS-C、抑うつ状態、中学生、学習理解、思春期心性

はじめに

文部科学省国立教育政策研究所¹⁾は、「中1ギャップ[※]」という用語の問題点として「『中1ギャップ』の語は、いわゆる『問題行動等調査』の結果を学年別に見ると、小6から中1でいじめや不登校の数が急増するよう見えることから使われ始め、今では小中学校間の接続の問題全般に『便利に』用いられています。しかし、いじめが中1で急増するという当初の認識が正しいのか、不登校の中

1での増加にしても「ギャップ」と呼ぶほどの変化なのかについては、慎重であるべきです」と述べている。当然、文部科学省国立教育政策研究所¹⁾が述べるように、何となく「いじめ」や「不登校」の増加を「中1ギャップ」というイメージを先行させて捉えるのではなく、実際起きていることを冷静に分析する必要がある。

そこで小学校から中学校の接続における「中1ギャップ」²⁾の実態を明確にし、学校不適応防止を

* 山口県立大学看護栄養学部看護学科

** 山口県立大学研究生

* Department of Nursing, Faculty of Nursing and Human Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

** Research student in Yamaguchi Prefectural University

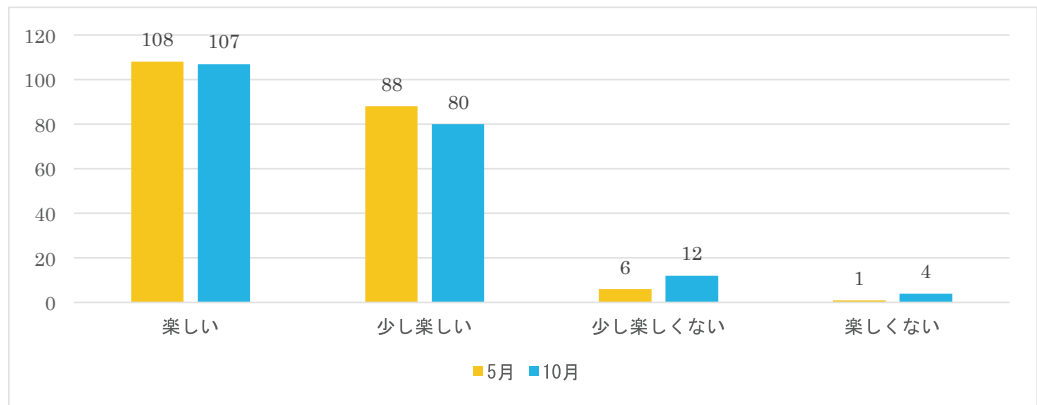


図1 学校の楽しさ

n=203 (人)

目的に、これまで中学1年生の中学生生活5月から10月の半年間での変化を調査し、まとめてきた³⁾。その結果、この半年間で中学校に慣れてきて、友達がいることで、学校生活の楽しさを感じていた。5月の段階で学校が楽しくないと答えていた生徒も、友達が出来たことにより、楽しい学校生活が送れる兆しが見えてきていた。また、「やろうと思ったことがうまくいかない」、「家族と話すのが好きではない」など、思春期にさしかかった年代の特徴の心性と共に、抑うつに対する傾向についても実態が見えて来たところである。特に中学校入学から半年で勉強に関しては徐々に理解度が低下すると共に、学校生活に楽しさを感じられなくなる様子や抑うつ感が増す傾向がみられた。

こうしたこれまでの調査³⁾で、小学校から中学校の接続において見えてきた学校生活で十分に適応できない実態について、今回、事例を増やし、平成24年度から平成26年度の3年間に入学した2校の新中学1年生を対象として「こころの健康調査」を行った。この調査を基に1年生の中学適応状況の実態をさらに明確にし、生徒の困り感についてその背景と「中1ギャップ」への支援について検討した。

※ [いわゆる中1ギャップ]：小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へ移行する段階で、不登校等の生徒指導上の諸問題につながっていく事態等（文部科学省）

方法

- 1) 調査：平成24・25・26年度の5月と10月に実施
対象：216人：A中学校1年生176人（平成24・25年度）B中学校1年生40人（平成26年度）

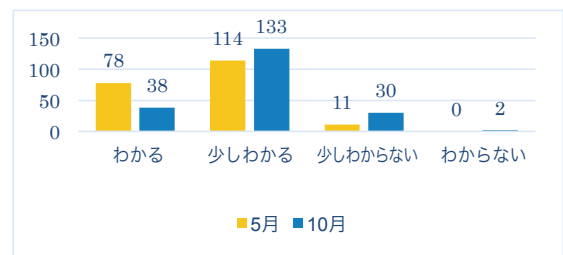


図2 勉強の理解

n=203 (人)

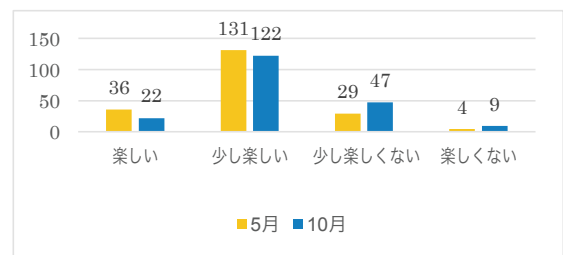


図3 勉強の楽しさ

n=200 (人)

2) 調査項目：

- ①学校生活についての質問
- ②困っていること8項目
- ③抑うつに関する質問を中心にこころの問題を加えた31項目（DSRS-Cの18項目を含む）
- ④16色のクレヨンで描く「色彩樹木画」テストと描いた木についての質問（5月のみ）

分析はIBM SPSS Statistics ver23を用いて行った。

3) 倫理的配慮

この調査は個人相談時に使うとともに、研究で使わせてもらう場合があり、研究で使う場合、個人情報もれのないように十分配慮することを口頭と文書で説明し、文書は保護者に見せるよう伝えた。

結果

有効回答数205人（男子103人、女子102人）（95.0%）であった。

1) 学校生活について

学校について5月には196人(95.6%)の生徒が「楽しい(楽しい+少し楽しい)」と答えていた。10月には187人(91.2%)で「楽しくない」ものが増えたものの、有意な差は見られなかった(図1)。

2) 勉強について

勉強の「理解(n=203)」と「楽しさ(n=200)」について聞いたところ、5月に「分かる」と答えた生徒が191人(94.1%)、「楽しい」と答えた生徒が169人(84.5%)であった。しかし10月には「分かる」と答えた生徒が170人(83.7%)、「楽しい」と答えた生徒が144人(72.0%)と減っていた。「理解」については $p<.01$ 、「楽しさ」については $p<.05$ で有意差がみられた(Chi-square test)(図2, 3)。

3) 困りごとについて

困りごとについて聞いたところ、5月に「ある」と答えた生徒が50人(24.4%)、10月は56人(27.3%)であった(n=205)。

困りごとでは5月、10月ともに勉強問題(5月21人、10月43人)が最も多く、10月では有意に増えていた($p<.01$)。その他の項目では5月、10月で有意な差は認められなかった(Chi-square test)。

相談についての自由記載は「勉強について」が多く、「授業が早く進むから、勉強についていけない」、「勉強がわからない」といった反面、「どうしたら勉強がわかるようになりますか」など、改善したいという前向きな気持ちも見受けられた。

身体の問題は「身体の成長(小ささ)」に困り感を感じていたが、10月になると訴えは少なくなっていた。

人間関係では5月に部活での先輩との関係に戸惑いを覚えていたが、部活に慣れてくる10月ではとあまり訴えがなくなった。むしろ友達関係で一定の数の生徒が交流困難を感じていた(図4)。

4) パールソンの抑うつ傾向自己記入式評価尺度について

4)-1 DSRS-Cのpoint

パールソンの抑うつ傾向自己記入式評価尺度(以下DSRS-C)を行っ

たところ、5月の平均pointは 7.9 ± 5.5 pointであり、10月は 8.6 ± 5.8 pointと若干高くなったものの有意な差はみられなかった(n=205)。

16point以上の抑うつ状態といえる生徒は5月に20人(9.8%)、10月に19人(9.3%)だった。

4)-2 DSRS-Cと困りごとの有無との比較

DSRS-Cのpointと困りごとの有無との比較をしたところ、5月は「(困りごと)あり」が平均 11.6 ± 6.5 pointであり、「なし」が 6.8 ± 4.6 point、10月は同様に 11.4 ± 7.1 pointと 7.6 ± 4.9 pointで5月、10月ともに有意な差がみられた($p<.01$; t-test)

さらに5月、10月ともに困りごとがあった生徒は27人(13.2%)おり、DSRS-Cの平均pointは 12.8 ± 8.2 pointであった。

4)-3 DSRS-Cの下位項目(18項目)

5月と10月で、「やろうと思ったことが上手くできない」と答えた生徒が最も多かった。また、5月から10月の経過の中で、「いつものように何をしても楽しくない」、「食事が楽しくない」、「楽しみにしていることがたくさんない」で有意な差が認められた(図5)。

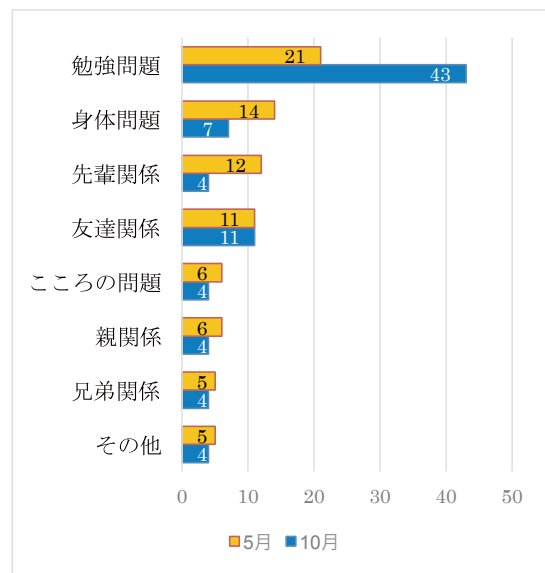


図4 困りごと (8項目)

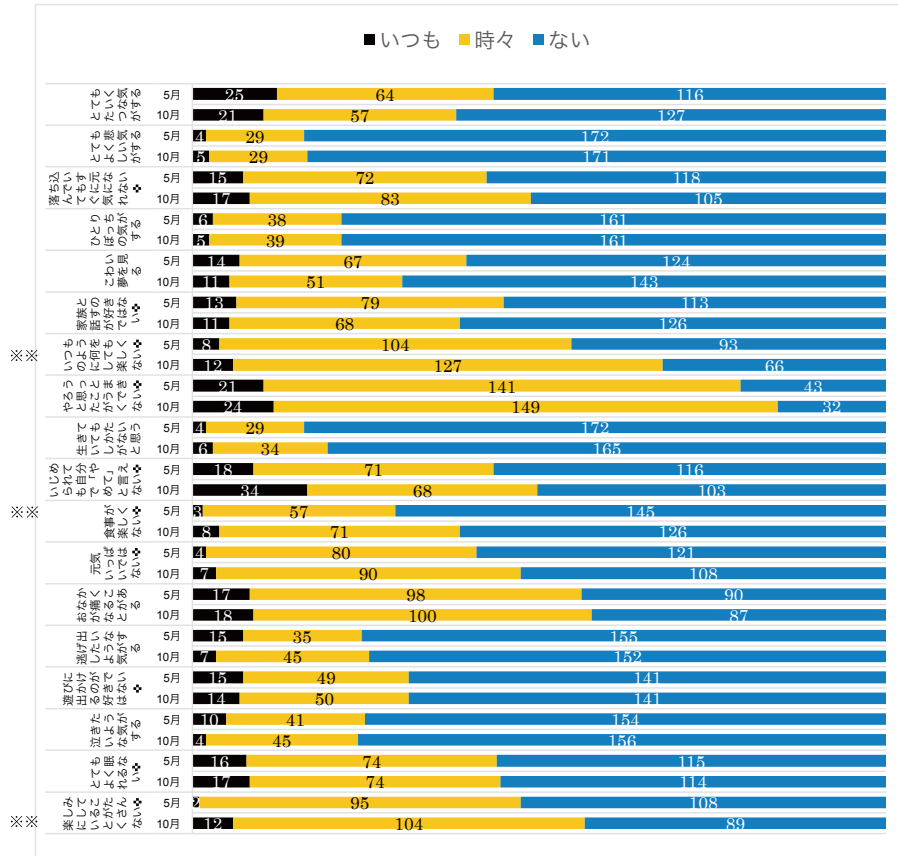
表1 困りごとの有無とDSRS-C pointの比較

	あり	DSRS-C point	なし	DSRS-C point
5月	50人	11.6 ± 6.5 point	155人	6.8 ± 4.6 point
10月	56人	11.4 ± 7.1 point	149人	7.6 ± 4.9 point

n=205

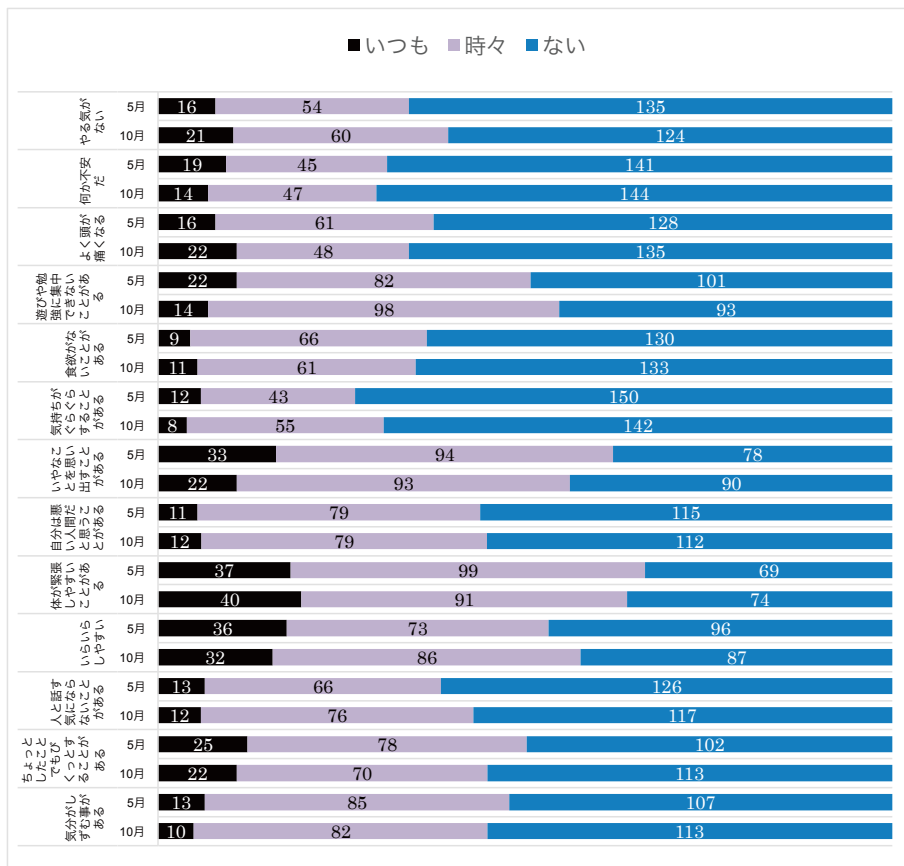
5月・10月 $p<.01$ t-test

「中1ギャップ」における問題と背景－小学校から中学校への接続における生徒の困り感について－



※※ p<.05 Mann-Whitney U n=205

図5 DSRs-Cの下位項目 (※印は逆転項目)



n.s. Mann-Whitney U n=205

図6 抑うつに関する項目

表2 勉強の理解との比較

	抑うつ状態	学校の楽しさ	勉強の楽しさ	友達の有無*
5月	n.s.	n.s.	p<.000	n.s.
10月	n.s.	n.s.	p<.000	n.s.

Chi-square test

表3 勉強の楽しさとの比較

	抑うつ状態	学校の楽しさ	勉強の理解	友達の有無*
5月	p<.012	p<.006	p<.000	p<.018
10月	n.s.	p<.035	p<.000	n.s.

Chi-square test

4) - 4 抑うつに関する項目 (13項目)

5月と10月で、「体が緊張しやすいことがある」、「いやなことを思い出すことがある」、「遊びや勉強に集中出来ないことがある」、「イライラしやすい」と答えたも生徒が多かったが、各項目で5月から10月の経過では有意な差は見られなかった。

5) 勉強の「理解」・「楽しさ」との関係について

勉強の「理解」・「楽しさ」と「抑うつ状態*」、「学校の楽しさ」、「勉強の（理解）（楽しさ）」、「友だちの有無**」、「困りごとの有無」について比較してみた。

※抑うつ状態は、DSRS-C 16point 以上・未満

※友だちの有無は、同じクラスに友だちがいるか・いないか（対象者全員、学校に友だちはいた）。

5) - 1 勉強の「理解」との関係

勉強の「理解」とそれぞれの関係を見たところ、勉強の「楽しさ」、「困りごとの有無」には5月・10月ともに有意な差があった（表2）。

5) - 2 勉強の「楽しさ」との関係

勉強の「楽しさ」とそれぞれの関係を見たところ、学校の「楽しさ」、勉強の「理解」には5月・10月ともに有意な差があった。勉強の「楽しさ」と「抑うつ状態」、「困りごとの有無」は5月に有意な差があったが、10月の段階では有意な差がなくなった（表3）。

考察

そもそも「中1ギャップ」は、文部科学省国立教育政策研究所¹⁾の言うように「小中接続の問題よりも中学校で顕在化する問題も、実は小学校から、『ギャップ』という表現が安易に用いられていることで、小6から中1に至る過程に大きな『壁』

や『ハードル』が存在し、それが問題を引き起こしているかのようなイメージを抱きがちです。しかし、多くの問題が顕在化するのは中学校段階からだととしても、実は小学校段階から問題が始まっている場合が少なくありません」としている。

しかしながら、小学校からの問題によって起こる生徒の状況であっても、中学校という新しい環境において、さらに適応できない問題が起こることは事実である。これについて富家ら⁴⁾は「実際、小学校を卒業して中学校に入学する環境移行事態において、子どもたちは、物理的にも精神的にも大きな変化を経験する。また小学校から中学校への移行期は思春期への移行期でもあり、心身ともに急激な発達的变化を遂げる」とし、環境の変化とともに生徒の心の成長・発達の問題が複雑に絡んでいることを指摘している。

今回の調査の結果、学校生活の中で小学校から中学校への移行では、新しい教科として「数学」と「英語」が本格的に始まること、他の科目についても内容が高度化することに加え、小学校でのクラス担任制から教科担任制への変更による影響と考えられる学習面での理解度、楽しさが、徐々に低下してきている結果が見えてきた。当然「困りごと」では勉強の問題をあげる生徒が最も多く、5月と10月では倍近くの生徒が困り感を訴えていた。

臼井⁵⁾は、小中移行期の学校適応の低下について、5つの原因を挙げている。第1に「学校規模の増大」、第2に「仲間関係の変化」、第3に「教師との関係の変化」、第4に「校則や決まりを守るなど生徒指導にかかわる指導の強化」、第5に「高校受験を意識して受験にかかわる教科の学習成績の重視」としている。こうしたことが生徒の勉強の困り感に拍車をかけていると言える。

同時に、この時期の心理的な特性として「やろうと思ったことが上手くできない」、「いやなことを

思い出すことがある」の自己肯定感の問題や、5月から10月の経過の中で多くなった「いつものように何をしても楽しくない」、「食事が楽しくない」、「楽しみにしていることがたくさんない」とした抑うつ的な感情の動きが増加している点が明確になってきた。さらに「体が緊張しやすいことがある」、「遊びや勉強に集中出来ないことがある」、「イライラしやすい」等の特徴も浮き彫りになってきた。まさに富家ら⁴⁾の言う「物理的にも精神的にも大きな変化」の経験の中でもがいている姿と言えよう。傳田ら⁶⁾の報告による同じDSRS-Cを使った調査で、抑うつ群が中学生で22.8%、小学生で7.8%であったと報告していたが、今回の調査では5月に9.8%、10月に9.3%であり、小学生に比べてやはり割合としては多くなっており、中学1年生としては妥当な割合だと考えられる。

今回、「中1ギャップ」として浮き彫りになったのは「学習の理解」と「思春期心性」の2つの側面である。この二つの側面の支援として、①学習支援による学習理解の底上げと②思春期心性の見守りがあげられる。

① 学習支援による学習理解の底上げ

調査対象の生徒は、新しい環境での学習や生活へ移行した段階の中学1年生半年の経過の中で、「学校生活への適応」は見られたが、「学習への（理解できない）困り感」が目立ってきた。生徒の「勉強が分かるようになるためにはどうすればいいのですか」の自由記載にかかれていた相談内容からも、「学習への困り感」を何とかしたいという思いが見受けられ、勉強ができることで勉強の「楽しさ」に繋がり、さらに「学校生活の充実（楽しさ）」を増大させる結果となるのだと考えられる。

② 思春期心性の見守り

思春期心性の中で遭遇する多くの課題、「やろうと思ったことが上手くいかない」、「緊張しやすい」、「いやなことを思い出す」、「集中出来ない」、「イライラしやすい」とした精神面での特性について、このことによって学校生活、家庭での生活に脱線がないように、また精神的な不調に発展しないような見守りが必要であろう。特に抑うつ状態にあった10%弱の生徒は特にその必要性が感じられる。

5月には「身体面での成長の不安」を14人の生徒が抱えていたが、時間が経つにつれて身体的な成長がみられ、半年で半数に減っていた。その他の生徒

も今後の身体の成長に伴い不安が解決されていくと考えられる。

まとめ

- ①対象の生徒は小学校中学校接続の中で殆どが学校生活には十分適応している姿が伺えた。
- ②学校生活半年で、勉強「理解」、「楽しさ」が段々と薄れていく状態であった。
- ③抑うつ状態の生徒が5月・10月で10%弱に見られ、困りごとを感じている生徒は有意に抑うつ点が高かった。
- ④今回、「中1ギャップ」として浮き彫りになったのは、「学習の理解」と「思春期心性」の2つの側面であり、その側面に対する支援を行うことで、学校生活を健康的に過ごすことができると考えられた。

文献

- 1) 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター：生徒指導リーフ 「中1ギャップの真実」、<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf15.pdf>、2015.12.14アクセス
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会学校段階間の連携・接続等に関する作業部会：小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理、p6、2012.
- 3) 中村仁志、太田友子、丹佳子：中学生のこのころの問題の検討：中学1年生の中学生活半年での変化、山口県立大学学術情報 7, 65-72, 2014.
- 4) 富家美那子・宮前淳子：教師の視点からみた中1ギャップに関する研究、香川大学教育実践総合研究, 18: 89-101, 2009.
- 5) 白井博：小学校から中学校への学校間移行の学校適応と学習動機に対する影響（1）：研究の目的と全体計画、札幌学院大学人文学会紀要 Journal of the Society of Humanities (92): 25-39, 2012.
- 6) 傳田健三、賀古勇輝、佐々木幸哉他：小・中学生の抑うつ状態に関する調査－Birlleson自己記入式抑うつ評価尺度（DSRS-C）を用いて－、児童青年精神医学とその近接領域、45、424-436、2004.